



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学
Hokkaido Information University



2023年
6月発行
通巻 第28号

FD・SDニューズレター

Hokkaido
Informative
University

巻頭言

新しい情報化社会に求められる デジタル人材育成に向けて

北海道情報大学学長 西平 順

背景

新型コロナウイルス感染症が終息に向かい、デジタル技術を基盤としたニューノーマルと称される社会形成が始まっています。高等教育研究機関においても、オンライン授業が増加するなど、想像以上の変化が起きています。そのため、新たな時代の要請に適應したカリキュラム編成や教授法など、教育基盤の導入が急務となっています。北海道情報大学（本学）は、教育研究機関として、デジタル技術による教育研究を広めることにより、未来地域社会に向けた人材育成に貢献します。

特に、コロナ禍を契機に広く導入されたオンライン授業と対面授業を併せたハイブリッド型授業等を一層拡大し、多様な素質をもった学生の能力を最大限引き出せるような学修者本位の教育環境整備を進めています。

学修者本位の教育の実現

本学は、人間性が豊かで情報技術に秀でた人材を育成する学修者本位の教育システムの実現を目指します。具体的な対応とし

て、①授業を社会課題等の解決に連動し、学修意欲の向上と主体性を育むこと、②不安・悩みを抱える学修者に教職員が連携し、対面やICTで個別に相談・助言を行うこと、③授業中や授業後に学修者同士で授業内容を確認し、相互に学び合うための学習管理システム（LMS）を提供すること、④卒業後に社会人として役に立つ授業体験を企業人との対面やオンラインで実現し、学びの重要性を気づかせること、⑤学修者の興味・関心のある科目を開設し、学内・学外で学修成果の発表・評価を行う「場」を設けることを目標にします。

ICTを活用した授業の拡大

コロナ禍を経験することにより、オンライン授業の必要性を感じています。特に、機能性の高いLMSを活用し、グループ学習など多様で柔軟性のある教授法と教育DXを併用したICT教育に取り組む必要性についてです。

本学は、ICT教育を次の計画に沿って実行していきます。（1）授業は対面を基本としますが、オンライン等による配信が理解度・成長度への効果が期待できる場合は積極的に導入すること（2）幅広い知識の獲得はICTを導入し、多面的に捉える訓練のためアクティブラーニングを推進すること（3）学びの国際通用性を高める

目次

1. 巻頭言	1
2. アドバイザリーボード会議開催報告	3
3. FD・SDフォーラム開催報告	5
4. 2022 CDIO Asian Regional Meeting 参加報告	7
5. FD研修会実施報告	8
6. 江別4大学合同FD・SD	9
7. 本学FDのDX	9
8. DX国際オンラインフォーラム	10
9. 2022年度SD活動報告	11
10. FD・SD関連行事および活動実績	12
11. あとがき	12

ため、情報技術を活用したグローバルな国際連携教育を推進すること (4) 長期インターンシップなどの社会体験教育を対面とオンラインの両面から推進すること (5) 事前学習をオンラインで行い、対面で意見交換を行う反転授業を推奨し、また学び直しも同様にオンラインで実施することなど5つの基本方針で進めて行く計画です。

教職員のスキルアップ

DXの推進を目標にICT教育を継続的に実行していくためには、教職員育成の必要があります。デジタル革命による新しい時代の大学教育を迎え、従来の教育法の長所と新たな教育法とが融合した教育的・技術的スキルが求められています。そのため、教職員はICT教育に関連した最新の学習法を積極的に学ぶ機会を必要としましょう。

デジタル技術やICT教育に対する価値観を共有・推進することも重要な課題です。今後、ICTに不慣れな教職員をサポートする専門スタッフの配置が必要です。幸いにも本学には教員および学生への支援システム（DX推進センター、ヘルプデスク等）が整備されています。今後、FD・SD委員会が企画するICT教育研修に参加することにより、教職員自らが新たなICT教育の分野を開拓して行くことを期待しています。

FD・SD委員会の役割と機能

新しい情報教育の時代に入り、FD・SDの重要性が一層増していることを、大学全体として認識する必要があります。FD・SD委員会は、教育の質を向上させる戦略

的な組織であり、その計画性と実行性により本学の教育研究の成果が生まれると言っても過言ではありません。FD・SD委員会は、学修の成果の向上を目標に、教職員に対し次の課題に積極的に取り組むことを求めています。(1) 担当授業の達成状況を点検・評価する取組について振り返りを促すこと

(2) 学修ポートフォリオや授業評価アンケートを自己点検や授業改善に活用すること (3) 教育の質向上のためにFD・SD研修会に参加 (4) 教育改善に向けたオープンな意見交換（学生・教職員・学外関係者）の場を設けること

(6) 学部・学科横断的な教育の推進を目指した教育プログラムの編成や授業科目の統合・調整を実施することなどがあります。

大学管理運営について

学修者本位の運営にあたり、ICT教育を主眼におき、学修全般を支援するための体制を整えることが肝要です。これに関し、管理運営組織は常にデータに基づくプロセスを経て、ICT教育の評価を実施し、教員がどれほど革新的に新たな学修法を取り入れてきたかを評価する必要があります。また、管理運営組織は、目標を達成するための戦略を示し、大学改革を実行するための教育基盤となる取組みに対して財政支援を検討しなければなりません。

今後の展望

コロナ禍の経験から、質の高いICT教育および学習方法が必要であること、またさまざまな情報連携のためにデジタル技術が活用できることなどが明らかとなりました。

ICT教育は、本学に入学した学生を成功に導く重要な教育システムです。ICT教育基盤を強化することにより、すべての学生が必要な知識と技術を身につけ、希望する職種につける機会を得ることができることを期待しています。本学は、ICT教育の基礎を築き人材育成を強化することにより、今後も選ばれる大学として成長しなければなりません。この目標を達成するため、本学教職員と学生が密にコミュニケーションできるLMSの設置や豊富な教育デジタルツールの導入について取組んでまいります。

末尾になりますが、学生と教職員が共に学べる創造性豊かな教育環境（ラーニングコミュニティ）の実現を目指します。本学が求めるICT教育は、知識や技術だけではなく、未来が求める健全な精神と柔軟性を併せ持つ情報エキスパートを育成することです。本学は、一地域にとどまらず我が国全体の情報技術教育研究領域をリードし、社会が求める情報人材の育成に貢献します。

参考文献

Florence Martin and Kui Xie. Digital Transformation in Higher Education: 7 areas for Enhancing Digital Learning. Educause Review. Educause. Edu/article/2022/9/

アドバイザーボード会議 開催報告

医療情報学部 医療情報学科 講師 木下 弘基

1. はじめに

令和4年9月9日カリキュラムアドバイザーボード会議が開催され、2024年度の新カリキュラム・アドミッションについて各学科等の取り組みについての報告があり、それぞれの報告に対して学外アドバイザーからコメントを頂戴し、質疑応答、本学教職員との意見交換が行われました。本稿ではこの様子について報告いたします。

2. 主な実施内容について

この会議はZoomを用いた遠隔オンラインの形式で行われ、本学の教職員108名、下記に挙げるアドバイザー10名にご参加頂きました。

表1 令和4年度アドバイザー（敬称略）

氏名	所属・役職
池川 和人	一般社団法人 北海道中小企業家同友会 代表理事
	株式会社ティーピーバック代表取締役
龍田 昌樹	江別商工会議所 副会頭
	株式会社龍田工務店 代表取締役
太田 正人	日本アイ・ピー・エムデジタルサービス株式会社 金融事業部 スペシャルプロジェクト担当
藤井 拓	元 株式会社オージス総研 技術部 ビジネスイノベーションセンター
小笠原 克彦	北海道大学大学院保険科学研究院 教授
西根 英一	株式会社ヘルスケア・ビジネスナレッジ 代表取締役社長
依田 知則	Chaos ASIA合同会社 代表パートナー
前田 保宏	株式会社ステラリンク 代表取締役社長
澤田 信夫	北海道札幌東商業高等学校 校長
川口 淳	札幌龍谷学園高等学校 校長

3. 各学科、部署からの報告

先端経営学科

幅広い分野に対応した人材育成を目指し、学修機会の確保のため、新カリキュラムでは教養教育は開講科目を全て履修科目とし、学外活動を単位認定する科目として「ビジネスデザインプロジェクト」を新設する。また、クラス担任制度を見直し2クラス体制から3クラス体制とし、1クラスの学生数を減らし、きめ細かい指導を行い、学生を社会に求められる人材に育成して送り出すことを目指している。

システム情報学科

実践的な技術力の育成を目指し、学生のニーズに合わせたシステムを導入する。具体的には教養科目、専門科目の数の見直し、合計124単位のうち教養、専門いずれも可能な単位を設け、システム開発に向かなければ教養を選択できるなど、学びの自由度の向上を測っている。また、従来の価値観で測れ

ないZ世代の学生へ対応するシステムを導入する。具体的には1年生は1講目を全て必修科目に、2年生は極力1講目を必修科目とすること、講義を休むと保護者に連絡するシステムの導入である。また、就職を強く意識させるキャリア教育のためキャリアデザインの内容の変更を検討している。

医療情報学科

新カリキュラムでは医療と情報にかかわる4つのコース特有の資格に直結する科目構成の見直しと強化を行った。その一例として、全学生が必ず取得する情報系の資格を設定した。初年次教育の充実のため、1年時から病院施設の見学や上級生と交流できる機会を設け将来の道筋をつけられるよう工夫した。また、学科の新しい柱として、①認知症、②江別市民健康サポートを掲げ、社会貢献できる学生の育成を目指す。

情報メディア学科

学生にとってわかりやすく魅力的な科目構成を目指し、教養と専門という分類ではなく、新カリキュラムでは基礎科目、実践型科目、専門科目、教養科目と新たに分類し、科目の難易度や特性を明確にした。また、学生指導に関して、従来は2年生までを担当教員が担当し、3年生以降はゼミ担当教員と分担していたが、退学防止の観点から学科教員全員が全学年の学生を見る体制とした。これによって、各学年に目が行き届いた、きめ細やかな指導が可能になると考えている。

教養教育

柔軟なカリキュラムを目指し、科目名の変更を行い、必修、選択の区分、およびカリキュラムへの組み込みは各学科で判断できる形にした。また、新しい入学前教育の制度を導入し、入学予定者を4象限モデルによって分類し、特に配慮が必要な層の学生へメンター教員がメールや電話、WEB会議システム等で面談を行うこととした。これによって入学後の教育へのソフトランディングが可能と考えている。

入学者選抜制度

令和7年度大学入学共通テストより「情報」科目が加わるため、試験内容、方法を検討している。本学での実施にむけて「情報I」の入試体制の準備、サンプル問題の公開を予定している。出題内容や難易度の設定に関しては課題が多い。例えばコンピュータ・プログラミングの試験を想定してもプログラム言語が高校ごとに異なるように、高校ごとに使用されている教科書、学習指導要領の内容には幅がある。これらの課題をクリアし受験生の公平性を担保できるように、高校側と積極的に意見交換しながら今後の試験内容や方法について検討してまいりたい。

教職課程

教職課程自己点検・評価のうち、特に学修成果の可視化のため、4年間の学修成果のレーダーチャートを作成している。教職課程を履修する学生のうち、大学卒業後、すぐに教職に就こうと考えているのは3割程度に留まっており、これをいかに変えていくかが課題である。

4. アドバイザーからのコメント、質疑応答

藤井様 システム情報学科の報告に対し、①現状と課題の優先度②科目選択の自由度の定量的な評価について質問があった。①について、単位修得率と4年間での卒業率の向上、大手企業への就職率の増加が回答され、②について、単位修得率と4年卒業率を定量的に評価していくことが回答された。

前田様 情報メディア学科の報告に対し、科目選択における学生の要望について質問があった。これに対し、学生の要望に合わせてAIデータサイエンスやデザイン系イラストに関する科目を設定したこと、学生が主体的に取得できる科目として必修科目を設定したことが回答された。

池川様 先端経営学科の発表に対し、地域のリーダーとなるような学生を輩出してほしいという意見を頂いた。また、主体性に欠ける印象を受ける最近の学生について、教員の学生対応の実際について質問があった。この質問に対し、自主的に学ぶ学生はその良さを伸ばせばよいが、一方で学習意欲の低い学生もいる。そのような学生に対して小クラスで担任教員を増やして学科全体で対応できるように工夫していることが回答された。

龍田様 先端経営学科の発表に対し、①学生の主体性をどのようにあげていくか、②基礎的なリテラシーの底上げのために教員はどのような工夫を行っているか質問があった。①に対し、1年時よりグループワークを行い、学生たちで議論をすすめる、発表する等の役割を経験してもらい、PBLを積極的に行っていることが回答された。また、アクティブラーニングを通して意識を醸成、習慣化させることが重要であり、その経験が積極的な就職活動にもつながっていくと述べられた。また、②に対して社会活動に積極的な教員が多く、学外の方と意見交換したり、授業で講演してもらったりする機会を設けていることが回答された。

太田様 システム情報学科の報告に対し、採用時には学生の基本的な情報系のスキル、コミュニケーション能力、課題解決力を重視していることが話され、①本学におけるチームでの開発やプロジェクトについて、②企業側が求めるシステム開発に関する基本的なスキルの習得について、③資格試験対策に

ついて質問があった。①についてグループワークによる講義や、プロジェクト・トライアルの科目を展開していることが回答された。②について学生に履修モデルを示しAI等を学べると情報提供し、専門家による指導が受けられる科目構成となっていることが回答された。③について、基本情報処理試験の合格率が低く、受験する学生も少ないが、HIUアカデミーという資格試験対策の部屋を設け、非常勤講師による講座や動画を提供していることが回答された。

小笠原様 医療情報学科の報告に対し、①江別市民健康サポートのプロジェクトの具体的内容、②卒業生数に関する質問があった。①について、プロジェクトは始まったばかりという実情にあり、2023年度、2024年度開始を目途に内容を検討中であることが回答された。②について年間で多い時は50~60人、少なくとも40人という現状であると回答された。

西根様 医療情報学科の報告に対し、高校卒業後の進路として、教育と研究の大学、教育と資格の専門学校、教育と実務の専門職大学が考えられるが、本学がどれを重視するか考える必要があるという意見を頂いた。加えて、現状は「技能」科目に偏ったカリキュラムとなっており、大学として学生の「知識」欲を満たす工夫が必要であること、「情報を知識に、知識を知恵に変えていく医療情報学科」のようなコンセプトを明確に打ち出すことが提案された。

依田様 情報メディア学科の報告に対し、最近の学生について、意思決定やあきらめが早い印象をもつが、そのような学生の学ぶ意欲を高めるカリキュラムの工夫について質問があった。これに対し、新カリキュラムでは1年生のうちから学生のニーズの高い専門の学修を可能としていることが回答された。同時に、専門の学修のためにも教養が必要と実感し、学年が上がっても教養も履修できる形にしていると回答された。

澤田様 教養教育の報告に対し、高校の各科の多様なカリキュラムに合わせた入学前教育の内容の提示、入試に関して情報科目の入試情報の提示の希望があった。また、教職課程に関して地方の学校教育に携わる教員を育成してほしいという要望があった。

川口様 入学前教育に関して、大学入学後の学修面での課題の解消のため復習で行っていると思うが、生徒が大学入学へのモチベーションの維持という点では復習よりも予習、課題研究のような形はどうかという提案があった。

最後に渡部重十副学長からの閉会挨拶をもって令和4年度アドバイザーリーボード会議は終了いたしました。

FD・SDフォーラム開催報告

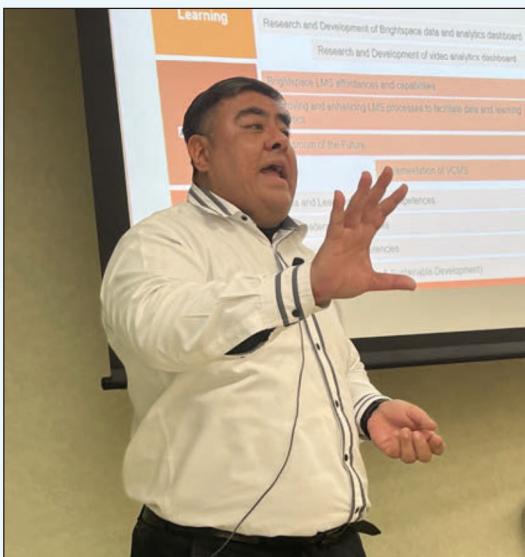
システム情報学科 教授(FD委員長) ソーラ・サイモン
先端経営学科 教授(学科長) 福沢康弘

The Evolution of Faculty Development

2023年2月14日、HIUの第1回「国際DXフォーラム」が開催されました。テーマは「Digitally Transforming Information Education - Challenges and Solutions」で、シンガポール、フィンランド、タイ、ギリシャの4人のゲストスピーカーがそれぞれの大学からZoomで参加する予定でしたが、残念ながらフィンランドからのスピーカーは体調不良のため発表できませんでした。また、HIUの教員によるプレゼンテーションも2件行われました。70名以上の参加者があり、好評のうちに終了しました。

Presenter

これがきっかけとなり、メインスピーカーの一人であるマーク・ニヴァン・シン氏がHIU FD/SDフォーラムのメインスピーカーとして招かれることになりました。ニヴァン・シン氏は、シンガポール・ポリテクニクの教育開発担当の副部長で、同校でCDIO、反転学習、自己主導型学習、専門職のための教育法などの教育イニシアティブの実施を主導しています。また、教員と密接に連携し、カリキュラムの再設計、教育・学習アプローチの革新、ワークショップやその他の専門家育成活動を行っています。



Forum Theme

FD/SDフォーラムは例年通り3月の第1木曜日（3月2日）に開催されました。テーマは、国際DXフォーラムで議論されたトピックを発展させたものでした。2月のDXフォーラムでは、シン氏にData Enabled Flipped Learningの利点について発表していただきましたが、今回はメインスピーカーとして、「Educators of the Future - Being Digital to the Core」をテーマに、変化する高等教育環境における教育者の役割について講演していただきました。インタラクティブなプレゼンテーション・ワークショップでは、反転学習の主な特徴を説明し、テクノロジーの活用方法を評価し、HIUの全教員に反転学習を導入する方法について検討しました。

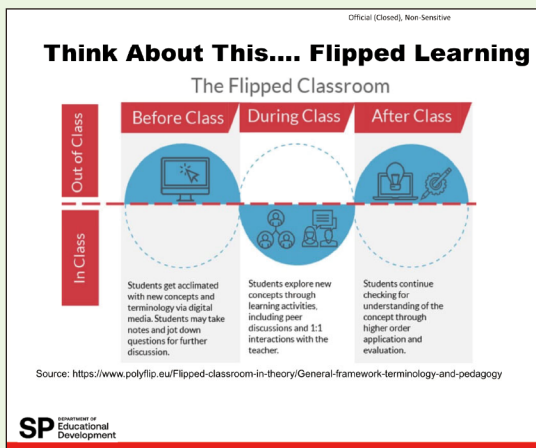


Technology and Feedback

ニヴァン・シン氏のプレゼンテーションでは、まず新旧のテクノロジーを比較し、古いテクノロジーもかつては新しかったことが指摘され、教育者としては常にスキルや考え方をアップデートする準備が必要であるとの説明がありました。しかし、シン氏は「テクノロジーは素晴らしいが、優れた教育学的デザインはより優れている」と述べ、参加者に対して、学生の学習を向上させるために最も重要な方法は何だと思うか、意見を求めました。多くの教員から回答がありましたが、ニヴァン・シン氏は「フィードバック」が最も重要な要素であろうと指摘しました。しかし、学生がフィードバックに従わない場合、教育者がフォローアップしたとしても、学生に責任を持たせなければ意味がないとも指摘しました。

The Problem

参加者からは、多様な学生、学力不足、インセンティブがない、フォローアップが難しいなど、効果的な学習という目標に影響を与える多くの問題について質問がありました。ニヴァン・シン氏は、シンガポール・ポリテクニクが反転学習を導入し、アクティブラーニングのための授業時間を確保するとともに、講師が授業中の時間を使ってより深い学びや思考を促すようにしたことを説明しました。1) デジタルメディアを活用した授業前の準備、2) 学習活動や仲間との交流を通じて授業中の理解を深める、3) 授業後に高次の応用や評価を通じて理解を確認する、という3段階の学習モデルです（反転学習図1参照）。



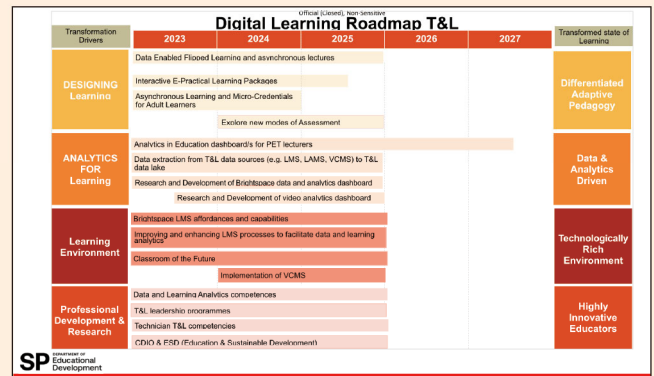
(図1: 反転学習流れ)

The Future

ニヴァン・シン氏は、「未来はすでにここにある」と付け加えました。ChatGPTのような新しいテクノロジーを使って、学習成果に基づいた授業計画を作成し、授業をアクティブにすることについて説明しました。また、ワークシートやPPTのアウトライン、講義のスクリプト、授業中の課題、さらにはアンケートの作成にもChatGPTを活用できることを説明しました。教育者は新しいスキルを共有し、学び、積極的に行動することを促しました。未来の教育者、つまり「デジタル・トゥ・ザ・コア」の講師とは、1) いつでもどこでも学習できるように設計、開発、提供し、自己主導の学習をサポートできる人、2) T&Lデータを効果的に活用し、さまざまな学生のニーズに応じて学習戦略を差別化してカスタマイズできる人、3) 学生の学習を促進するテクノロジーの活用に自信がある人です。

The Digital Roadmap

さらにニヴァン・シン氏は、シンガポール・ポリテクニクのデジタルロードマップを紹介し、今後5年間でどのように学習のあり方を変革していくかを示しました（図2参照）。シンガポール・ポリテクニクでは、すでに100%非同期授業を実施しており、変革をもたらすために、1) 学習のデザイン、2) 学習のための分析、3) 最適な学習環境の構築、4) 強固な専門家の育成と研究、の4つの分野をターゲットとしています。



(図2: シンガポール・ポリテクニクのデジタルロードマップ)

Think Big, Start Small

ニヴァン・シン氏は、教育者は誰でも1クラスから始められ、データとテクノロジーを使って反転学習を強化することができるかと訴えました。関連するデータを収集し、学習をカスタマイズし、プログラムの効果を確認することができます。ニヴァン・シン氏は、進化に役立つお気に入りのツールやLMSを紹介しました。

HIU's Future

フォーラムの最後には、質疑応答の時間が設けられました。ワークショップや講義は英語で行われ、HIU事務局国際交流・留学生支援課の小田島係長にうまく通訳していただきました。多くのHIU教員が、これらのアイデアのいくつかをさらに発展させるきっかけとなったことが期待されます。

2022 CDIO Asian Regional Meeting 参加報告

経営情報学部 先端経営学科 教授 福沢 康弘

1. はじめに

2022 CDIO Asian Regional Meetingが10月11日～13日の3日間、シンガポールのSingapore Polytechnicで開催され、本学からサイモン・ソーラ教授と福沢の2人が参加しました。

日程は以下の通りです。

10月11日（月）

午前：オープニング、基調講演

午後：アイスランドで行われた18th International CDIO Conferenceの報告

10月12日（火）

午前：基調講演、各教育機関の実践報告

午後：CDIOワークショップ

10月13日（水）

午前：Singapore Polytechnicにおけるデジタル教育改革に関する実践報告

午後：参加国会議、次回開催国決定（フィリピン）

2. 内容

“Education for Sustainable Development in the Digital Age”をメインテーマに開催された今回の会議では、教育機関や企業における数多くの実践例が報告されました。



写真：Worldwide CDIO Initiative Co-Director, Juha Kontio氏の基調講演

教育機関からは、デジタル・トランスフォーメーション（DX）を活用した教育改革の事例が数多く紹介されました。中でもSingapore Polytechnicでは、デジタル・ラーニングを、「すべての学生・教職員を導く根本的原理」と位置づけ、STUDENT-FOCUSED, HUMAN-CENTRIC, DATA-DRIVENの3原則をもとに教育改革を行ってきたそうです。特

に印象的だったのは独自に開発したデータドリブンの反転授業「Data Enabled Flipped Learning」の紹介でした。学生個々の学習状況をデータの活用により個別にモニタリングし、学生個人に最適な学習機会を提供するもので、大きな成果を上げていることが報告されました。

また企業からは、DXが未来の企業のあり方にもどのような影響を及ぼすのか、といった問題提起がなされました。現代は単に利益を追求するのみではなく、ESG投資に代表されるように、企業が持続可能な社会づくりにいかに貢献するかが厳しく問われる時代です。サステナビリティが強く意識される時代において、DXは人々の思考様式やリーダーシップのあり方にも変化を及ぼす重要な役割を担っているという主張がなされました。

3. 成果

今回のAsian Regional Meetingに参加した成果としては以下の3点が挙げられます。

- 2020年に改定されたCDIO Standardsおよび2022年に改定されたCDIO Syllabus 3.0の概要について理解を深めた。
- DXと関連した教育改革について各国の先進事例を学ぶとともに、参加者と意見交換できた。
- アジア地域でのCDIOリーダーであるSingapore Polytechnicのメンバーとコネクションを作ることができ、今後の交流について意見交換できた。

特に、Singapore Polytechnicの教育開発部副部長、Mark Nivan Singh氏と知り合うことができたのは大きな収穫でした。同氏はSingapore Polytechnicのデジタル・ラーニングプログラム開発の責任者であり、同校の今後5年間のデジタル・ラーニング・ロードマップを作成した人物です。同氏とのご縁は2023年2月14日の「オンラインDXフォーラム」のスピーカーとして、そして同3月9日の本学FD・SDフォーラムの講師として、教育とDXの最先端事例をお話しいただくという成果に結実しました。

4. おわりに

COVID-19により、私たちの暮らしや社会は大きく変容しました。教育も例外ではありません。DXの重要性は今後ますます高まっています。本学においても、海外の先進事例に学びつつ、特色ある教育をさらに推進する必要性を痛感した3日間でした。

※本出張にあたり学長裁量経費を使わせていただきました。ご尽力いただいた西平学長並びに関係各位に感謝申し上げます。

FD研修会実施報告

経営情報学部 システム情報学科
教授 五浦 哲也

ることができるよう困り感のある学生に気づき、学生の話に耳を傾け、適切な支援を実施していくことが必要であることを学んだ。

1. はじめに

2022年度FD委員会の主催、共催として企画・実施しました学生相談室、障害学生支援、教職課程に関する研修会、講演につきまして、以下にご報告します。

2. 学生相談室研修会

第1回研修会では、夏季休業後の学生のモチベーションをいかに向上させるかを教職員で学ぶことをテーマとしました。第2回研修会では、改正障害者差別解消法をふまえ、本学の全教職員が発達障害についての共通理解することをテーマとしました。

(1) 第1回研修会「学生の主体性を引き出す会話のスタイル」

講師：北田 雅子 先生（札幌学院大学 教授）

日時：2022年9月7日（水）15：00～16：30

場所：本学204教室

内容：学生が主体的に考え、判断し、行動していくためには、教職員がどのように対応をしていくことが重要であるかについてグループワークを取り入れた研修でした。学生についての教職員間の共通理解の確認や「動機づけ面接」の基本的な理解をふまえ、教職員と学生の望ましい関係構築における学生の立場に基づく対応について学びました。教職員が良かれと思



い指導・助言していることが、果たして学生の主体性を育むことに繋がっているのかという点から、個別面談、授業における効果的なアクティブラーニング運営について学生の立場から問い直す機会を得ることができました。

(2) 第2回研修会「発達障害の理解と対応」

講師：齋藤 真善 先生（北海道教育大学札幌校 准教授）

日時：2023年3月28日（火）13：30～15：00

場所：本学松尾記念講堂

内容：発達障害の自閉スペクトラム症（ASD：以下ASDと記す）について、豊富な臨床経験の中から当事者の方の自己分析から「感覚処理の問題」、ASDの生理学的特徴から認知特性や学習特性をふまえ、自己認知支援を行う際の留意点や生理学的特徴の「認知粒度」からコミュニケーションのポイントについて説明があった。これらをふまえ、大学での発達障害支援の在り方について調査結果に基づき、発達障害のある学生が大学生活で直面する学修や人間関係や日常生活におけるスキル、能力の課題が提示された。「できることを増やし、できないことを自覚し、適切な場面で相手にヘルプを求め



3. 障がい学生支援の大学における支援体制に関する講演

改正障害者差別解消法により全国のすべての大学が支援体制を確立することが求められました。本学においても障害支援ワーキンググループが組織されています。本講演は、教職員の共通理解を目指し、障害学生支援ワーキンググループの木下弘基リーダーと相談の上企画しました。

講演「私立大学障がい学生支援体制構築に向けて」

講師：松川 敏道 先生（札幌学院大学 准教授）

日時：2022年11月10日（火）13：30～15：00

場所：本学松尾記念講堂

内容：まず、障害学生支援

をめぐり背景として、障害者権利条約から障害者差別解消法の経緯や障害者基本条約は社会モデルによる障害定義であり、自由権としての差別禁止、社会権としての合理的配慮の規定されていることが示された。次に合理的配慮についてとは何か、障害者差別解消法と障害学生支援について、日本学生支援機構の調査結果や障害者施策の変遷から障害者差別解消法において大学の実施体制として対応すべき内容について札幌学院大学の学内規定や内規について説明があった。最後に合理的配慮の構成要素や内容決定の手順について学んだ。



4. 教職課程研修会

教職課程の円滑な運営には全教職員の理解と協力により、学生に教育現場における素養を効果的に培うことができます。また、2022年度より各大学において取組が義務付けられた教職課程自己点検評価において学内における教職員の共通理解による協働体制の確立が強く求められています。これらをふまえ、本テーマを設定しました。

研修会「本学教職課程は、4年間を見直し履修学生に「教える」技術をどのように伝えているか」

講師：五浦 哲也（北海道情報大学 教授）

日時：2022年8月5日（金）11：00～12：00

場所：本学204教室

内容：本学教職課程は、経営情報学部設置され、商業（高校）、数学（高校）、数学（中学校）の教員免許状を取得することが可能である。教職課程を履修する学生が教員としての素養を身に付けるために4年間で身に付けていくことが求められている知識・技能や教員免許状を取得するための条件について説明があり共通理解を図った。また、学生は、在学中に教育実習において生徒に教科を教えることが必須であることをふまえ、「教える」ための教職課程で指導している基礎的基本的な知識・技術のポイントについて実践事例をふまえて説明し指導技術について説明と学生指導への協力が求められた。

経営情報学部 システム情報学科
教授（FD委員長）ソーラ・サイモン

江別市には5つの大学・短大があり、約1万人の学生が学んでいます。2019年、江別市と市内の大学・短期大学、江別商工会議所が、産学官連携による地域貢献と高等教育の活性化を目的に連携協定を締結し、「江別未来創造プラットフォーム」が誕生しました。

このプラットフォームが「江別4大学共同FD・SD」の創設を後押ししました。昨年はコロナの関係で、全4回の会議とメインイベントである「江別4大学合同FD/SD年次大会」は、Zoomを使ったオンライン開催となりました。会議は2022年9月12日（月）14:00から16:25まで、テーマは「ICTを活用した授業運営と今後の大学事務のあり方について」でした。各大学の発表者には、コロナ危機の際に身につけたICTに関する知識・技術・技能のうち、大学が通常の学内授業を再開した際に引き続き活用できるものについて報告していただきました。



今回は北翔大学、札幌学院大学、酪農学園大学、北海道情報大学からの参加でした。それぞれの発表テーマは、「結局、DXは小さなことの積み重ね」「オンラインコンピュータリテラシー教育の事例」「moodleを用いた学生・教員支援の研究」「オンライン友達作りについて」でした。後者のプレゼンテーションは、本学の斎藤一教授と河原大准教授によって行われました。オンライン説明会には約100名の参加者があり好評のうちに終了しました。

情報メディア学部 情報メディア学科
准教授 広奥 暢

2022年度は対面授業が再開され、それまで授業に必須だったICT利用が必須ではなくなりました。しかしながら、ICT利用の利点も見えてきた今こそ授業のDXが始まるのかもしれませんが。オンライン、オンデマンド、ハイブリッド様々な授業形態が試された結果、講義の内容に合った選択ができるようになりました。理想的な授業形態を採用するには、これまで以上にICTを活用することが教員に求められていると考えるべきでしょう。従って、FD活動もICT活用をより一層進める形で実施されるべき常用にあると思います。FD活動自体のDXが求められているということになるでしょう。

LMSを授業展開に必須の基盤と考え、その一層の利用方法を教員が学ぶことや、LMS以外の様々なサービス、ソフトウェアを授業に取り込んで授業を改善していく方法を模索する試みをFD活動として展開して行く必要があると考えています。

2023年度に入ってから数ヶ月でAIの利用に大きな変化が現れ、講義自体やそのなかでの評価に大きな影響を与えられていると考えられています。教員は個々の講義においてAIの利用についての対応を迫られています。2023年3月に行われたFD・SDフォーラムの講演では、教員が講義資料の作成にAIを利用することもできるのだという話を伺うこともできました。これも踏まえFD活動の中でAIへの対応、利用について教員が学び教授法として取り入れたり、評価の仕方、さらには授業形態を再検討したりする機会を設けていく必要性を強く感じています。

2023年度FD委員長を拝命しましたので、対面授業が戻ってきた今だからこそLMS利用を軸としてAI対応を見込んだ研修会を通してFD自体のDXを進めて行くべきと思い定め、2023年のFD活動の計画を立てて行きたいと思っています。

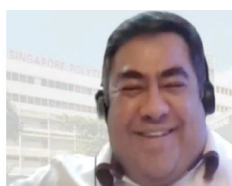
DX国際オンラインフォーラム

経営情報学部 先端経営学科
准教授 ライアン・ジョエル

“DX”、または“デジタル・トランスフォーメーション”という表現は、曖昧でありながらも最近よく耳にする言葉です。この表現を土台にして、今年2月14日に国際DXオンラインフォーラムを開催しました。いくつかの大学の先生方からの話を賜り、お互い様の理解を含めるために話し合いました。以下、各発表者のトークは概略的にまとめてあります。

マーク・ニヴァン・シン先生
Singapore Polytechnic

反転授業 (flipped classrooms) は、DXの一形態です。宿題として、学生は毎回の授業前にビデオを見たり、小テストを受けたりします。小テストの点数から、生徒の得意・不得意がわかるようになります。先生方からは、反転授業に慣れるまでは、先生も学生も時間がかかるものですが、先生が学生について直感的に知っていることをデータで補うことができます。つまり、データによって直感がより根拠あるものになり、学生のニーズやスキルに合わせて新しい教材を作るのに役立っています。



ナタ・クプタスチエン先生
ラジャマンガラ工科大学
タニヤブリー校 (RMUTT)

コロナ渦はひどいものでしたが、DXを拡大し加速させることになりました。学生も教師も、同期式と非同期式の両方のオンライン教育モードに素早く精通する必要がありました。非同期の例としては、反転授業の“マイクロレッスン”があります。これは、とても短いビデオと理解度チェックリストを使って、学生の理解度を測るものです。さらに、2022年現在、「デジタル化」と同様の要素をCDIOシラバス(3.0)に追加することが検討されています。



イアニス・ザンノス先生
イオニア大学 (ギリシャ)

DXのおかげでアートとエンジニアリングを融合できます。ギリシャの2つの大学と東京の1つの大学におけるプロジェクトは、低価格な技術を用いながら遠距離でダンス授業を行っています。カメラとセンサーを利用して学生の動きや音をとらえます。数値データに変換して送信し、再合成しま



す。ダンサーは、この再合成されたデータの音を聞きながら、動きを調整することができるのです。

福沢 康弘先生、河原 大先生、広奥 暢先生
北海道情報大学

HIUでは現在、様々なDXプロジェクトは実験中です。例えば、ミンクラフト・ゲームにて北海道の街を再現したバーチャルリアリティ (VR) や、情報大学の図書館をインタラクティブVRなどの取り組みを行っています。



また、コロナ渦によってDXを後押ししたのが、Moodleをベースとした学習管理システム (LMS) の活用促進、Google Meets、Microsoft Teams、Slack、Scrapboxなど、多様なコミュニケーションツールの普及です。これらの活用経験がDXを後押ししました。このようなツールは数が多いし、使い方もそれぞれ違うので、全部を使いこなすのは難しい。しかしながら、いろいろなツールを試した結果、先生と学生或いは学生同士・先生同士とのコミュニケーション方法を増やすことになりました。



本フォーラムはDXだとも言えます。Zoomを利用し、海外からも気軽に参加できました。しかも、情報大初の英語で行われたフォーラムでありました。特徴は、一方的な発表の連続ではなく、ディスカッション形式でした。参加者同士で質疑応答の時間が十分あったおかげ、活発なフォーラムになりました。

コロナは幸いに一時なものでしたが、DXはこれからも続くものです。IT技術の進歩に伴い、私たちは大学で行う教育を変化、適応させ、デジタルに変換し続ける必要があります。最近では、ChatGPTがDXのサブテーマとして注目されています。本フォーラムと同様に、ディスカッションしながら、多くのことを議論することができます。発表された皆さん、そして参加された皆さん、誠にありがとうございました。

2022年度SD活動報告

SD委員会 委員長 瀧澤 浩基

2022年度（令和4年度）のSD活動として、学内で開催したSD研修会と、学外の研修会への参加状況等について、以下に報告します。

1. 学内でのSD研修会の開催（教職員対象）

次の6件のSD研修会を、教職員を対象として開催しました。

(1) 講演会「大学における新型コロナウイルス感染症対策と今後の展望について」

- 日時：2022年6月23日（木）16：45～17：45
- 内容：新型コロナウイルス感染症はどのような病気か、またワクチンやコロナ対応の注意点など日常の感染対策を中心に知識を深めた。
- 講師：人見 嘉哲氏（北海道保健福祉部技監）

(2) eラーニング「情報セキュリティ理解度チェックテスト」

- 実施期間：2022年6月21日（火）～7月8日（金）
- 実施方法：NPO日本ネットワークセキュリティ協会のサイトにあるeラーニングを利用
- 内容：1回25問の4択問題で、90点以上を合格。回答後に不正解の問題の解説を見て理解を深める。

(3) 研修会「ハラスメント防止に関する研修会」

- 日時：2022年12月2日（金）16：15～17：45
- 内容：ハラスメントはなぜ起きるのか、ハラスメントを未然に防ぐにはどうしたら良いのか理解を深めた。
- 講師：森 順子氏（株式会社ハッピーアロー代表取締役）

- 備考：ハラスメント防止委員会と合同開催

(4) 講演会「金沢工業大学に見る大学改革」

- 日時：2023年1月20日（金）9：20～12：10
- 内容：金沢工業大学における職員の意識改革と組織体制はどのようにになっているか、また教育内容や学生主体の取り組み、活性化の工夫について学んだ。
- 講師：福田 崇之氏（金沢工業大学 産学連携局次長）

その他、(5)「江別4大学合同FD・SD」、(6)「発達障害の理解と対応」（学生相談室主催、SD委員会共催）を実施しましたが、本ニューズレター内の別頁で詳細な報告がありますので、割愛させていただきました。

2. 学内でのSD研修会の開催（事務職員対象）

2022年度から、事務職員を対象として業務効率化等の研修会を行っています。

(1) 研修会「業務効率化に向けたマインド形成ワークショップ」

- 日時：2022年9月14日（水）13：00～17：30
- 内容：そもそも業務効率化の目的は何か、どのような思考法で効率化を考えるか事例を交えながら実現方法を考えた。
- 発表者：小田島 敬太（国際交流・留学生支援課兼学生課）

(2) 研修会「情報共有の実例紹介」

- 日時：2022年11月24日（木）16：30～17：30
- 内容：情報共有のメリットなど、実際に情報センター事務室でのTeams活用事例などの紹介を行った。
- 発表者：田村 亮太（情報センター事務室）

(3) 報告会「初任者研修報告会」

- 日時：2022年12月15日（木）16：15～17：45
- 内容：日本私立大学協会北海道支部が実施した初任者研修会「私立大学職員として必要な基礎知識と実践的な理論の修得」についての報告を行った。

- 発表者：谷口 翔梧（法人本部経理課）、高屋敷舞（会計課）、波佐尾 隆徳（総務課）

(4) 報告会「金沢工業大学視察報告会」

- 日時：2023年1月12日（木）10：40～12：10
- 内容：金沢工業大学の学生が主体的に学ぶための仕組みづくりと、アントレプレナーシップに関する施設等の報告を行った。
- 発表者：小田島 敬太（国際交流・留学生支援課兼学生課）、八重原 史貴（教務課）

3. 学外の研修会への参加

次の昇格者対象階層別研修会がリモート（Zoom利用）で開催され、本学からは3名が参加しました（eDCグループ全体で対象職員が参加）。

階層	2級（主任職）	3級（係長職）	4級（管理職）
対象者	似鳥 克馬	小田島 敬太	對馬 聡子
実施日時	11月17日（木）午後	11月21日（月）終日、22日（火）午後	11月15日（火）終日、16日（水）終日
内容	仕事に対する意識、基本行動、組織力の活性化等	監督者の役割、基本行動、部下育成等	管理職の役割、基本行動、マネジメントの基礎、人事労務等
講師	(株)ジェック	(株)ジェック	(株)ビジネスコンサルタント

その他にも、事務職員は日本私立大学協会北海道支部、私立大学通信教育協会主催の研修会や各種オンライン研修に参加しました。

FD・SD活動 行事実績（2022年度）

日 程	行 事
4月1日(金)	新入教員対象研修会
5月19日(木)～6月9日(木)	前期前半終了科目の授業評価アンケートの実施
6月23日(木)	SD研修「大学における新型コロナウイルス感染症対策と今後の展望について」
7月14日(木)～8月4日(木)	前期後半終了科目の授業評価アンケートの実施
8月5日(金)	FD講演会
8月18日(木)～8月28日(土)	前期夏期集中授業の授業評価アンケートの実施
9月6日(火)	江別4大学によるリカレント教育ワークショップ
9月7日(水)	FD研修「動機づけ面接」
9月1日(木)	新入教員対象研修会
9月8日(木)	アドバイザーリーボード会議
9月12日(月)	江別4大学合同FD・SD研修（オンライン）
10月10日(月)～14日(金)	2022 CDIOアジア地域会議
10月28日(金)～11月18日(金)	後期前半終了科目の授業評価アンケートの実施
11月10日(木)	FD・SD研修「私立大学障がい学生支援体制構築に向けて」
12月2日(金)	FD・SD研修「ハラスメント防止に関する研修会」
12月23日(金)～1月27日(金)	後期後半終了科目の授業評価アンケートの実施
2月6日(月)～2月11日(土)	後期冬期集中授業の授業評価アンケートの実施
2月14日(火)	オンライン国際DXフォーラム
3月2日(木)	2022年度北海道情報大学FD・SD フォーラム開催
3月28日(火)	学生相談室報告会・研修会（共催）

FD委員会の活動実績(2022年度)

委員会・WG名	月例ミーティング等日程
FD委員会	5/6(金)、7/1(金)、7/6(水)、8/26(火)、 10/6(木)、11/30(水)、1/30(月)、2/9(木)、3/8(水)

あ と が き

ようやく本格的なウィズ/アフターコロナに向けて動き出しましたが、この数年間、世の中は大きく変化しました。教育現場でも、これまで通信教育や予備校などの一部で使われていたオンライン教育環境と手法が一気に普及しました。また、ChatGPTのような生成AIの登場と急激な進化もDXを加速させています。このような急速な環境の変化によって、我々も教育手法を進化させることが問われています。これをチャンスと捉えて、活動していければと思います。

情報メディア学部 情報メディア学科 教授 隼田 尚彦